

鹿児島大学水産学部における構成員（個人）点検・評価に関する外部評価

1. 実施経過と実施手順について

1.1 妥当性

(1) 実施経過

評価システム構築においては、被評価者のモチベーションに留意しつつ作業を進めることが望ましいが、当学部においては講座代表（被評価者）を網羅した講座等連絡会議を踏まえ、段階的にコンセンサスを得ながら点検・評価システム構築がなされており、適切な手順で作業が進んだと結論する。

(2) 実施手順

人に依存しないシステムとして完成されており、かつその理論構築にも矛盾点が全くない統計的手法の活用についても、確率モデルの選択、修正方法等において妥当である。

1.2 効率性

実施手順に関する効率性について述べる。教官による評価票の記載だけで、システムティックに評価まで作業が流れるようにデザインされており、作業効率は良い。

1.3 効果

相対評価を取り入れているため競争原理がはたらき、学部という一組織の成長が効果として期待できる。

1.4 達成度

システムデザインの段階としての目的は終了している。今後も実際の運用を通じて、実施手順の妥当性の改善が続くと予想する。

1.5 自立発展性

評価結果を踏まえて、強みを維持し、弱みを補う作業は、年度ごとの個人目標と一致する。したがって、おのずと個人の目標管理システムに発展し、個人における PDCA サイクルが備わると予想する。

1.6 その他（自由記述）

これまでは、競争原理に馴染まない組織であったため、未だにモチベーションに個人差があるらしい。今後、共通の価値を評価する作業を貪欲にやり続けることで、成長し続ける組織として新たな風土が培われると考える。

2. 点検評価の内容について（点検項目、重み付け、集計法などを含む）

2.1 妥当性

教育、研究、社会貢献、国際貢献・交流といった学部の理念の領域を踏まえた点検評価項目を設定しており、かつ共通の認識で評価できるように設問が設定されているため、妥当である。

2.2 効率性

客観的に示し得る実績、実施記録によって事務的に自己評価が進むように配慮されており、評価者の作業効率性は良い。集計は、個人の能力に依存せず事務的に作業が流れるように、マニュアル等を整備するなどの工夫が必要になるかもしれない。

2.3 効果

現段階では、授業等の実施結果については評価されるが、授業の実施内容にまでは直接的には言及していない。ただし、今後のカリキュラム管理システムとの併用によって、授業ニーズと授業数に関連性が出てくれば、結果的には授業の質をも評価することになり、より効果が出てくると考える。

2.4 達成度

現段階ではよく練られた評価項目であるとの印象を受ける。点数のウエイトについても複数で決められたものであり、恣意性を排除している。試行的運用に供するには十分目的を達成していると考ええる。

2.5 自立発展性

本評価システムが実施に移された後に、定期的に評価システム自体の有効性評価と改善を進めることで（PDCA サイクルの構築）、さらに自立発展すると考える。また、ここでいう有効性判断の基準を、既存の学部理念や目標管理基準等の達成度と捉えることによって、個人 PDCA サイクルと組織 PDCA サイクルとの間に明確なつながりが生まれると予想する。

2.6 その他（自由記述）

学部運営にも民間企業なみの手法を必要とされる時代になりつつあることを実感した。素晴らしい機会を与えて頂き感謝します。

上記の記載内容について、鹿児島大学水産学部における構成員（個人）点検・評価の目的に従い、必要な場合、同学部または同大学内外に対して公表されることに同意します。なお、貴学部で得た資料・情報については、公表しないことを併せて同意いたします。

氏名：